

【個人研究】

まなざしと自然体験  
- メルロ = ポンティからの実践 -

角 田 巖\*

Natural Experience from Free Observation  
- A Practical View from Merleau-Ponty -

Iwao TSUNODA

Perception does not look at a material entity as an external object nor does it reproduce an object within the mind. Human beings and material entities are not a dualistic existence of subjects and objects.

According to Merleau-Ponty, perception materializes when humans and entities work together.

When humans make an free observation of a material entity, the entity reveals the characteristics or meanings from within itself.

A human approaches the real nature of the entity from the perspective of space and time.

A human makes contact with nature within an event with nature. Such an event is filled with fresh experiences with nature.

A human makes contact with an entity itself through experiences with nature and recognizes the real nature of the entity.

Futhermore, a universal principle is also extracted from raw and wild experiences with humans. That is why the free observation that questions an entity is the source of intelligence.

, 知覚 - 私からの出発

1. 知覚 (perception)

デカルトの「延長」と「思惟」という二つの実体論以来、永く人間と自然、物質と精神、主観と客観の二元的自然観、科学観、世界観

が打ち立てられてきた。二元的世界観においては、自然、事物、身体は人間、精神に対する外在的、物理的で操作的な対象としてとらえられる。人間は、この対象を個別的存在とし、存在の性質を抽出し、純化し、人間界のために利用してきた。また、個別的存在間の因果関係や相関関係を見きわめ、展開していく必然性を明らかにしようとしてきた。この

---

\*つのだ いわお 文教大学人間科学部人間科学科

ような自然、事物の客観的対象化と抽象化は科学の名の下に文明と文化に貢献してきた。ところで、こうした存在の抽出は一つの性質か、事物の具象の現実の多くを切り離し、切り捨てて作り上げられた要素である。事象、事物の本性と真理は、それらのあらゆる具象と事実、現実の生彩を失うことなく昇華されているものである。人間が自然をあくことなく利用しつづけてきた年月と、特に近年の技術革新による過剰なエネルギー使用が地球の危機を招いたと言われている。また、同時に、科学、経済、政治、教育、意識、理念を含む人間生活・文化のパラダイムが問われている。

近年、事物、自然、人間の有機的関係が重視されてくるにつれて、環境、生命、共生の生態的視点へと移ってきた。そこには、これまでの二元的世界観、客観的自然観、個別抽出的存在論を越えた共存と共生の人間科学の構築が求められている。

メルロ＝ポンティは、人間が生きている世界を人間の知覚の働きを通じて現象的に把握しようと試みた。知覚は、個別に切り離された感覚器官が独立して対象を受動的に写し出し形成しているのではなく、また、精神が判断や思考によって対象を再合成して作りだしているのでもない。各感覚器官は互いに連合し、同時的に作用しつつ、事象、事物、生物、人間と交感し、循環し合う。ひとは、この総合によって存在を把握していく。この会得は感覚器官というより、「現象的身体」による存在とのふれ合い、交換である。「身体とは自然的自我であり、いわば知覚の主体なのだから」と言われるように、総合的、統合的身体こそが存在に向かい合っていくのである。私はこの世界に関する能力を身体をとおして開いていくことから、「私とは私の身体である」とさえメルロ＝ポンティは明言する。私は身体によって直に世界に触れ、運動し、同時に存在が私の身体を包み、滲透し、私を動かす。ひとはそれらを観察対象として意識し、認識する以前に身体として感覚し、この感覚が即時に、一気にそれらとふれ合い、そ

こにそれらとの交流を生み出す。この円環は、ひとと存在との生命的交感であって、観察的認識や、言葉による理解以前の、存在が「生まれ出ずる状態で捉えられた実際の知覚」<sup>3</sup>としてとらえられる。

## 2. 現前野 (champ de présence)

知覚とは、存在とひとの身体が互いに滲透し合う交感、交換であり、それはひとの生の実存から生じてくる。ひとにとって世界は、客観的・物理的世界なのではなく、また純粹に理念化された超越的な世界でもない。それは、「生きられる世界」(le monde vécu)である。生きられる世界は状況下のいまを生きる日々的人間的意味の世界であると同時に、不可知の神秘であり、深淵の生成の自然世界でもある。

ひとは知覚の最初の開けにおいては単に一つの存在を取り上げて見ているのではなく、自己の視野に広がる様々な事象、事物、生物、人、景、領野、地平、世界を眼前にしている。やがてまなざしを特定の存在に集中すると、景や領野は背景に後退し、存在が照明をあてられたように浮かび上がってくる。現前にあった景、領野、地平はその奥にさらなる見えない景、領野と地平、世界を繰り広げているに違いない。世界は、無尽蔵の果てしない地平としていま・ここに見えるものと見えない(隠れている)ものを含め、現前の知覚に連なっている。判断と認識、思考以前のこの知覚は、私のまなざしを通して事象、事物、生物、人、景、領野、地平、世界から開かれてくる。知覚は、この開かれた現前に迎えられている。すでに私以前に存在していて、まなざしに対して開くようにおのれを繰り広げるこの「匿名的」で「非人称的」な様相こそ知覚の本性としてとらえる。「ひとが、私において知覚するのであって、私が知覚するのではない」<sup>4</sup>と言われるゆえんである。存在は、存在のただなかから自らを開き、私に向かう。私は私自身から抜け出して、存在へと「出発する」。これが知覚であり、この自然な知覚

野への現象的知覚を基盤として認知的な知性的認識が成り立っていくのである。自然的、現象的知覚は知性的認識に至っても決して抹消されてしまうものではなく、知の地平の裾野として広がっているのである。

、まなざし - 方向と出会い -

### 1. 展望 (perspective)

地平は私の視点、方向、距離から望見される世界の拡がりであり、視点は身体の移動によって変動していく。これが知覚の「展望性」(perspectivisme)である。ひとは神のように全てを見渡す俯瞰的な視野を持ち得ない。それがひとの限定条件であると共に、ひとに存在が意味と特性を開示してくる手続きともなっている。一つの視点は一つの展望を開くが、その他の視座は現時点では潜在化されてしまう。しかしながら、身体の移動によって限定的ながら他の展望も可能となる。移動による新たな展望においても、以前の展望は失われることなく、現在の展望に潜在しているのである。ひとは頭と潜在の循環的な保持を通して、経験世界の中で存在の安定した光景、形態、性質、意味を持続することができる。この展望の循環の前に、存在は「何一つ匿れた部分を持たず」、「全面的に自己を開陳している」のである。一つの展望は常に存在の完璧ではないが一つのまとまった姿であり、また次の展望も一つのまとまりである。展望によってそれぞれの部分的な集合が総合化されていくのではなく、一つひとつのまとまりの事物の開けが次のより豊かなまとまりの開けへと展開していく「移行の総合」(synthèse de transition)である。それぞれのまとまりの差異は、空間的移行のみならず、時間の移行にも基づく差異である。どの展望も存在のある特質、事実を現前化させていくが、空間軸・時間軸の移行に伴いその質の差異を生みだす。また、各展望は見えつ隠れつしながら内包され、互いの差異を照射し合い、存在の豊穡を膨らませていく。存在が自らを惜しみ

なく開いているこの時に、客観的認識と思考をあるいは既存の知識を導入してしまえば、存在はその時点で自らを決定し、閉じ、存在自身のさらなる放射を止めてしまう。

身体の移動に伴う展望の空間の視座はわかりやすいが、それに劣らず時間の視座が重要である。私の展望とは、「時間の流れによって解体されてはまた修復される我」<sup>9</sup>のことである。存在を展望している現在のまなざしには、他の次元の展望をもこの今に包含している。すなわち「あらゆる時間から見られている」という「過去把持」(rétention)を持ち、同時に「私は、現に見られている私の現在を、その過去として持つ」というような「未来把持」(protention)を手中に収めている<sup>10</sup>。この時間の展望が、存在の特性の本質へと絶え間なく迫る深さ、奥行を克ち取っていく。また、私の展望はこの空間と時間の移行、移動を行うことによって他者の展望にも近づくことになる。何故なら、他者もまた移動によって存在の本性に向かっているからである。そして、私と事物と他者の交流が、「間主観」として磨かれてくる。普遍性はこの方向にある。

### 2. まなざし (regard)

ひとが存在にまなざしを向けるとき、存在はまなざしの方へ存在自身を開いてくる。仏語で“sense”が「方向」と「意味」を表すように、まなざしの方向と存在の意味があわせ合う。メルロ＝ポンティは、知覚が存在からの光の反射を受けて、「ばらばらな可視性を収斂させ、光景内に粗描されるものを完成にもたらずような或る装置」<sup>11</sup>を「まなざし」としている。可視性とは、ひとと存在との交換によって浮かび出てくる可能性としての存在の姿、意味や性質などの現れである。「見るものはただまなざしによってのみおのが見ているものに近づく」<sup>12</sup>というように、まなざしはひとにとって最も明白でかつ直接的な存在とのコミュニケーションの手だてである。まなざしは、存在を固定的に、分節的にとらえようとする観察的認識とは異なり、様々な

展望を自由にへめぐり、存在の可視性を次々と浮かび上がらせたり沈めたりする。まなざしは、存在の円周を、内部を、他の存在との関わりを、存在を囲んでいる領野を遊覧する。「私がそれを眼で見まわす時にだけ、私のまなざしは鮮明でありつづける。自由に這いまわるのがまなざしの本質的特性なのだ」<sup>13</sup>。

まなざしは動く身体としての「運動性」を特性としていて、運動として存在にたどり着き、知覚を開いていく。まなざしは、存在と密着し、絡み、まといつく。そして、存在との熟成を醸していくのである。メルロ＝ポンティが「<見る>ということが<離れて持つ>ということであり」<sup>14</sup> というのも、また「視覚はまなざしによる触知なのだ」<sup>15</sup> というのもこのまなざしの触視を表している。この視覚の触感が、ひとと存在とを握手のように触れ合わせる。ひとはまなざしによって存在に触れ、同時に存在はまなざしに滲透してくる。「まなざしは、見えるものを包み込み、それに触れ、そこに身を添わせる」<sup>16</sup> と、瞬時に存在が自らの本性を開き始める。まなざしは、私と存在とを結びつける回廊である。

まなざしには、素直な、自然的知覚が繰り広げられている。澄明な青空を見つめていると、私は青空の彼方に引き入れられるように感じ、空の中の浮き雲のようにすっかり空に身を委ねてしまう。このとき空は、私の身体を揺り動かす「或る種の生命的振動」の場としての空となる。私は私自身から出発し、存在の彼方へと向かう、そして存在に入り込んで、身を委ね、「物に身を捧げるべきまなざし」<sup>17</sup> となって存在に「住まいに来る」<sup>18</sup>。住まうとは、まなざしを通して身体で感じることである。風にたなびいている遠くの梢を見上げる私には、聞こえるはずのない葉群のざわめきの音が聴こえる、小枝のしなりが感じられる。さらに、住まうとは、存在のなかから存在を見、触れ、他の存在の見地からその存在を望見し、存在の生命や本質にまで見きわめ、触れていこうとする試みである。それは、いわば、観光客や、異邦人としてではな

く、町に住んで町を知っていこうとするという在り方である。まなざしは、私が存在とこの瞬間を生きようとする「共生」への投企である。メルロ＝ポンティの「私が真実の物に到達するのはまなざしによってであり」<sup>19</sup> という確言は、存在に住まうというこの知覚の生きようを示したものである。

### 3. 交差 (chiasma)

知覚は「自然的物事」との原初的な出会いであり、「『われわれ』と『存在するもの』との出会い」、この「出会いを疑うことはできない」<sup>20</sup> と述べられている。この出会いがまなざしとしての在り方なのである。この出会いの有様をメルロ＝ポンティは、数々の言葉で表現している。「交わり」(communication)<sup>21</sup>、「交差」(chiasma)<sup>22</sup>、「共存」(coexistence)<sup>23</sup>、協働 (synerby)<sup>24</sup>、「聖体拝領＝共生」(communion)<sup>25</sup>、「編み合わせ」(entrelacs)<sup>26</sup>、共働 (co-fonctionnement)<sup>27</sup> などである。ただ、その「縁結び」は事物への「参与」であって、「見えるものを決定的に包み込んだり、見えるものによって決定的に包み込まれたりするものではない」<sup>28</sup> というようにあくまでも差異を持った「交差」なのである。この交差は、私が<見るもの>としてあるのみならず<見えるもの>でもあるからである。私は身体として世界の織り目の中に編み込まれているし、存在も私も世界の中に受肉されているのである。私は、世界や自然といった共通の分母を基底に持ち、「見られるもの」として「見えるもの仲間」<sup>29</sup> なのだから。見るものと見えるものとはまた触れ合う関係も挿入させながら「編み合わされる」円環を描いていく。それは、シャロンによって「円環性の思考」<sup>30</sup> と表現される。しかしながら、両者は完全な合致に同一化されるのではなく、互いの差異を照合させつつある同意、創造を生みだそうとするのである。

、出来事としての体験

## 1. 出来事 (evenement)

知覚とは、時間と空間の展望を「いま」・「ここに」見えるものと、見えないものとを収斂させて、存在と私が互いに自らを開きつつ出会う「交差」である。そして、知覚は、具象の存在を抽出して保存する観察的認識以前の、事象・事物・生物・人・領野・地平・世界を広げている原初的状況を含んだ生な存在に住まうまなざしとして生きる。このような知覚の一回限り性、時間的生成、出会いの状況性・偶然性というめぐりあわせは、また自然の存在とひととの「出来事」としてとらえられる。

ホワイトヘッドは、自然の理解にあたって、科学的認識の母胎として知覚を「出来事」(event)として把握することを重視した。自然とは、第一に思考に先だって「感覚を通じての知覚のなかで観察するものである」<sup>31</sup>。また、「生命の事実とは、生命の出来事のことである」<sup>32</sup>から、自然の理解と把握は究極単位の出来事から出発しなければならないとしている。自然の有機的な一存在であるひとにとって、自然は「たえず推移する出来事の複合体」<sup>33</sup>なのであり、ひとはこの出来事の関係ネットワークを通して自然と交流しているのである。ホワイトヘッドにとって出来事は、「それがあるところのもの、それがあるとき、それがあるところである」<sup>34</sup>というように過去と未来を連続させている現在に湧出してくる。そして、いま起きているこの出来事は、自然の一員である私の身体を通して参加するという「知覚しつつある出来事」(percipient event)<sup>35</sup>として体験しているのである。

メルロ＝ポンティにとっても「出来事」(événement)というのは、一回限りの具体的な事実であり、抽象的な概念ではない。だから、「出来事という概念そのものが客観的世界に占める場所を持たない」<sup>36</sup>のである。もし出来事を体験している誰かがいなければ、それは自然現象と言われるようなものである。出来事は、世界の「空間的・時間的全体のなかから有限な観察者によって切り取られてく

る」<sup>37</sup>というように特定のひとのある角度の展望を必要とする。その「有限な誰かの視覚が出来事の個性性を基礎づけている」<sup>38</sup>のである。この知覚しつつある出来事こそがひとの生き方に大いなる意義をもたらす。それは、世界の中でひとのある歴史的な立ち会いなのである。出来事に立ち会った私はその出来事を第三者として客観的に眺めるのではなく、自らがその出来事の知覚的状況に内属しながら参加しているのである。知覚するとは、この出来事を体験することである。

## 2. 体験 (experience)

体験(経験)は、視覚・知覚を含めた身体運動を伴う行為であり、その行為は常に身体、事象、事物、生物、人、自然、世界との出来事である。即ち、体験とは、出来事との交感、交換である。

この出来事としての体験にとって重要なことは、「私の経験と他者の経験との交差点で、それら諸経験のからみ合いによってあらわれてくる意味なのである」<sup>39</sup>と言われる。ここでも私の自然、世界との生な体験は、知覚・身体の間と時間の開かれた展望と接触によって他者の知覚と連なる可能性を満たして、間主観、間体験として実現されていく。この開かれた生な体験のうちに自然的な知が生まれてくる。

「経験こそ、いわばわれわれの知の臍の緒であり、われわれにとっての意味の源泉なのである」<sup>40</sup>。

意味の源泉とは、既存の知識、辞書・辞典などの意味、説明、解釈、概念の言語的思考の素材としてのみならず、それらに先って、広く存在に対する人間的理解と把握をも示している。また、存在について未踏の意味の発見をも可能としている開明である。生な、新鮮な、とれたての、瑞々しい輝きを放つ、自然の輝きと驚きに満ちみちた私と存在とのふれ合いの結節、結び目である。

「私が生き体験するところのすべてについて、私がそれを生き体験している限り、私は

その意味をおのれのものとして所有している。そうでなければ、私はそれを生き体験するはずもなからう」<sup>41</sup>。

存在の本性と世界の真実が、いま私の前に体験を通してこの輝きと新鮮さを保ちながら顕在あるいは潜在している。とはいえ、私の知覚は、全能ではなく、いまだ乏しい展望しか開かれていないかもしれない。私はさらに、絶え間なく自然を、世界を見る、知覚する、知るという経験を積んでいかねばならない。

「世界がまさしくわれわれが見る当のものであるということ、しかも、われわれが〔改めて〕それを見ることを学ばなければならぬということは、二つながら同時に真実なのである」<sup>42</sup>。

私の前に出来事の「現実性」(réalité)と「事実性」(factialé)があるかぎり、たとへ時的な見間違いがあるとしても、それは不十分な展望によるものなのであって、私はいたって真実への道程にある。そのためには、「世界に身を捧げた主体」として世界を見る姿勢をとり続けなければならない。そのスタンスとは、物理的、客観的な自然・世界として対峙するのではなく、それ以前の直接的な、生な、自然との連脈を目指す「生きられる世界」に存続しつづけることが問われる。私が生き体験するいまを生きるとは、私と事物、事象、人との交差に噴出し続ける現在を共生することである。この時に生気づいている存在の秘かな生命や本性の開けに立ち会う僥倖を祝うことにほかならない。

身体は、出来事の体験によって、存在の意味をつかもうとする志向性をそなえている。体験は、身体はこの働きによって見分ける、いわば概念なき認識「行動的認識」(praktognosie)<sup>43</sup>を有している」と言う。この認識は未だ言語作用によって固定化されず、未明の意味関係を待つ流動性を有している。そこから、体験とは、身体の運動性による世界への接近と意味の把握という「実践知」としてもとらえられる。これは、存在との交換、すなわち出来事の体験から生まれてくる自然的

な知である。

### 3. 問い (interrogation)

私の知覚の現前(自然的知覚)には、存在の実際と本性が開かれている。それ故、知覚は「<見えるもの>についての天賦の才をもった<世界の測定者>なのだ」<sup>44</sup>と言われるように、存在の本性はひとと存在との織りなしから現出してくる。この自然的知覚には「一切の知識は知覚によって開かれた地平のなかに位置している」<sup>45</sup>というように、十全の知が可能性として発芽している。

意識は抽象的なものではなく、存在にそくして生じてくるものであるが、やがて、「<見るから><知る>へと移行して、そこに自分自身の生命の統一を獲得する」<sup>46</sup>方向へとむかう。知覚の中では<感性>と<知性>の間の境界はない。意識は自然的知覚を吸い上げて、存在の認識的把握へと推移する志向性をも持つ。認識とは「形成されると同時に知覚を逃れ去る意味を捉え直し、内面化し、真に所有せんとする努力なのだ」<sup>47</sup>とされる。この<見る>から<知る>への連続的開明のメカニズムは知覚自体のなかにある。いま、<見えるもの>と<見えないもの>を同時に収斂させつつ、存在を開いていくまなざしのうちに「学びつつある意識」<sup>48</sup>が萌えていく。その萌芽は、存在の主流の意味を存在と私とが生成して、同時に他者との間主観として洗練させ、成就させる。そして、意識から認識へと胎内育成し、誕生させる。

客観という科学的認識に関しても、こうした知覚(身体)と存在の協働という「経験の深部そのもののなかに客観の起源を見いださなければならない」、「客観的世界の生成における決定的瞬間がある」<sup>49</sup>ということを尊重しなければならない。この連続的な知への発展の上に、さらに普遍化をめざす抽象的、構成的知である概念、観念、理念が構築されていくが、それもまた、まなざしを向けている存在の自然の沃野から源出されてくるのである。

知覚は一方で現前の状況と世界から客観的

な知と普遍的な理念に向けて言語作用を始動させようとするが、また現前の事象、事物、生物、人、領野、地平、世界と共生しつづけようとする自然への憧憬を持続させる。何故なら、存在も自然も世界もひとにとっては深淵であり、無尽蔵であって、いかなる理念でも完全に包摂し得るものではないことを、ひとは理解しているからである。そのため、ひとは、現前そのものをそのまま受け入れようとしたり、さらには自然や世界の神秘へとひたすら魅せられていたいと望んだりする。これがひとにとっての「生の存在」(l'Être vertical ou burut)であり、「野生の存在」(l'Être vertical ou sauvage)<sup>9)</sup>である。それは、自然的知覚に現前している始元的な自然世界である。ここで、自然とは、自然物といった物理的な、客体的なとらえ方ではなく、生命を持つものは自らの生成を自身の力によってくりかえすその有機性を、また無機物を含めて存在間の関係性と生態性、およびそれらの総合的な成り立ち、成り行きのことである。さて、存在が私にとって「生まれいずる状態で」立ち現れてくるとき、私はその出現を「驚き」で迎えている。そのときの存在は、ひとが生まれ育ってきた知識と文化の構造以前の相をも含んで、全体がおののき、揺れながら未決定のままで現前している。この未決の存在の出現は、ちょうど囁語のように多様な文化への母体として基礎づけられているものである。あるいは、文化を生み出していく源としての自然(physis)の相でもある。ひともまたこの自然に連なるものであり、存在の自然性とこの大地において「共自然性」(connaturalité)として共生しているのである。ただ、ひとにおいては、この自然に独自の人間的意味を付け加えたり、変換したりする。ひとは、「生命～自然～文化」という成層を生きるものでもある。ひとには、「自然が人間と化することにほかならぬところの、人間が自然と化すること」<sup>1)</sup>の領野として開かれている世界に生きる「野生」が息吹いている。ひとは高度の文化に志向しつつも、同時

に根源としてのこの野生を憧憬し、そこに立ち戻り、自身を開こうと希求する。ひとはこの野生のまなざしを抱きつづけるからこそ、存在とひととの、自然と文化との共存である真の知の樹立を可能とすることができる。

しかし、安易な妥協に陥らないで、この両義的なアプローチを統一して真実を開明することは困難であろう。ひとはすでに教育によって身につけた知識、文化をまとっている。また、科学的客観的認識に基づいて性質や因果関係を求める能力を獲得している。言語による思考を論理化させ、概念や理念を形成する能力を養っている。この知力によって自然を理解しようとする。この方法は、いわば「見ることによって知る」という存在の客観的対象化、分節的意味づけ、性質の抽出操作、相関的操作、思考の概念化によって本性を探求するアプローチである。また、一方で「見ることを知る」という学びがある。これは、見ることを筋質化し、強化し、存在への深度を鋭化していくことである。存在と絡み合うまなざしの粘着性を増加し、身体と存在との往還運動をしなやかで、確たるものにしていく。メルロ＝ポンティは、まなざしにおいて、存在が自ずから開いてくる自然の姿を切望したが、野生とはこの生な存在の開明を求め、存在の曙光を訪ねていくことである。私がまなざしている一本の樹木を知覚、認識するには、その木の名前を知ったり、木についての知識を手に入れるといった既成の性質、意味を得るだけでは十分ではない。むしろ、乾燥した知識で木を覆ってしまえば、木の生命は失われてしまう。現前のこの樹木と語らうには、樹木の生命の輝きを身に浴びながら「あたかも植物的世界の創造第一日目のように、この木の個別的観念をふたたび描き出し始めるのでなければならない」<sup>2)</sup>とされている。

メルロ＝ポンティは、この原初への遡行を「問い」としてとらえる。この問いとは、既成の解答を得るためではなく、「問い自身の驚きの確認」<sup>3)</sup>を行うことである。この驚きの強度は、「純然たる観察者が、いっそう深

いかなる源泉から彼自身着想を汲みとっているか<sup>54</sup>にかかっている。問いとは、空間と時間の展望の運動によって、〈見えるもの〉だけでなく、いま・ここに〈見えないもの〉をも収斂させながら事物が開明してくるのを待つ姿勢である。そして、「あるがままの世界に向かって降りてゆき、これに問いかけがそこに浮かび上がらせる諸多の照合関係（références）の森のなかに入って」<sup>55</sup> ゆくとという決意である。さらに、この森（野生）のなかに入りこむという「出来事」の意味を明らかにしようとする踏み込みである。そして、存在への問いに対して、ひとは自ら出来事の経験を表現し、存在のなかに創造していくことが一つの答えとなる。

「いっさいの知覚、知覚を前提とするいっさいの行為、つまり、人間が身体を使う行為は みな、すでに、本源的な表現なのである」<sup>56</sup>。

言語、芸術、身体表現などは、この経験の創造の一つである。言語については、一方で芸術創造があり、もう一つに存在の概念化、観念化、理念化の思考がある。言語の芸術的創造では、存在の野生の世界に踏み入り、存在そのものを開き、存在とひととの新たな結花を表現する。同時に、言語による、思考、概念化、観念化、理念化においても、存在の生で、新鮮な具象性のその肌理の輝きを失せさせず、その母液を胎内化した表現、創造、結晶であることが求められる。

「なぜなら、言語もまた、おのれのなかに、事物そのものを一それらをそれらの意味に変えたあとで一住まわせる力をもった、一つの世界のごとき何かになるからである」<sup>57</sup>。

存在が実存している領野、地平、自然という大地を背景に、その光と、輝きが放射してくる理念。そのような理念であるならば、それが一つの強力な展望として存在の豊かさを照らし出し、湧出させる知力となる。その普遍性への知もやはり、まなざしが存在に滲透していく問いから誕生してくるのである。

「問い」、それは「ひとつの身体を持ち、

また〈まなざす〉すべてを心得ているかぎでの私」<sup>58</sup>（・・・筆者）が「自然をまなざす」時間である。

#### 引用文献

- 1, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」 竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、みすず書房、1974 (1945) p8
- 2, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」 竹内芳郎、小木貞孝訳、みすず書房、1967 (1945) 年、p325
- 3, 同上、p83
- 4, 同上、p17
- 5, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」 前掲出、p21
- 6, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」 前掲出、p131
- 7, 同上、p131
- 8, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」 前掲出、p92
- 9, 同上、p254
- 10, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」 前掲出、p129
- 11, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」 p157
- 12, Maurice Merleau-Ponty 「眼と精神」 滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1964 (1953,1964) 年、p258
- 13, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」 前掲出、p55
- 14, Maurice Merleau-Ponty 「眼と精神」 前掲出、p263
- 15, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」 中島盛夫監訳、法政大学出版社、1994 (1964) 年、p217
- 16, 同上、p214
- 17, Maurice Merleau-Ponty 「眼と精神」 前掲出、p262
- 18, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」 前掲出、p127
- 19, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」 前掲出、p20
- 20, 同上、p259
- 21, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」 前掲出、pp171
- 22, Maurice Merleau-Ponty 「眼と精神」 前掲出、p260
- 23, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」 前



- 掲出、p194
- 24, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」前掲出、p230
- 25, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」前掲出、p15
- 26, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」前掲出、p224
- 27, 同上、p352
- 28, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」前掲出、p223
- 29, 同上、p217
- 30, Ghyslain Charron 「メルロ＝ポンティとマルティネ」菊川忠夫訳、世界書院、1991(1972)年、p118
- 31, Alfred North Whitehead 「自然という概念」藤川吉美訳、松籟社、1982(1919)年、p3
- 32, 同上、p62
- 33, 同上、p188
- 34, 同上、p60
- 35, 同上、p67
- 36, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」前掲出、p307
- 37, 同上、p307
- 38, 同上、p307
- 39, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」前掲出、p23
- 40, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」前掲出、p256
- 41, 同上、p56
- 42, 同上、p14
- 43, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」前掲出、p237
- 44, Maurice Merleau-Ponty 「眼と精神」前掲出、p262
- 45, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 2」前掲出、pp9-10
- 46, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」前掲出、p83
- 47, Maurice Merleau-Ponty 「世界の散文」滝田静雄、木田元訳 みすず書房、1979(1951)年、p166
- 48, 加賀野井秀一 「メルロ＝ポンティと言語」世界書院、1988年、p117
- 49, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」前掲出、p133
- 50, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」前掲出、p333,p345他
- 51, 同上、p302
- 52, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」前掲出、p90
- 53, Maurice Merleau-Ponty 「見えるものと見えざるもの」前掲出、p165
- 54, 同上、p178
- 55, 同上、p67
- 56, Maurice Merleau-Ponty 「シーニュ 1」竹内芳郎監訳、みすず書房、1969(1960)年、p102
- 57, 同上、p64
- 58, Maurice Merleau-Ponty 「知覚の現象学 1」p56

#### 参考文献

- 1, 広松渉 「メルロ＝ポンティ」岩波書店、1983年
- 2, 木田元 「メルロ＝ポンティの思想」岩波書店、1989年
- 3, 実川敏夫 「メルロ＝ポンティの超越の根源相」創文社、2000年
- 4, 森脇善明 「メルロ＝ポンティ哲学研究－知覚の現象学から肉の存在論へ」晃洋書房、2000年
- 5, 長滝祥司 「知覚と言葉－現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い－」ナカニシヤ出版、1999年
- 6, 村上隆夫 「メルロ＝ポンティ」清水書院、1992年
- 7, Paul Grimley Kuntz 「ホワイトヘッド」紀伊國屋書店、1991年
- 8, 清水誠 「近代<知>とメルロー＝ポンティ」世界書院、1988年
- 9, Laurie Spurling 「メルロ＝ポンティの哲学と現代社会、上・下」丸山敦子訳、お茶の水書房、1981(1977)年
- 10, X.Tillette 「メルロ＝ポンティあるいは人間の尺度」木田元他訳、大修館書店、1973(1970)年
- 11, 鷺田清一 「メルロ＝ポンティ－可逆性－」講談社、1997年